1　道徳科における評価

1　学習評価の意義

学習における評価とは、児童生徒にとっては、自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるものです。教育において指導の効果を上げるためには、指導計画の下に、目標に基づいて教育実践を行い、指導のねらいや内容に照らして児童生徒の学習状況を把握するとともに、その結果を踏まえて、学校としての取組や教師自らの指導について改善を行うサイクルが重要です。

小・中学校学習指導要領（平成２９年３月告示）総則においては、学習評価の充実について新たな項目が置かれ、具体的には、学習評価の目的等について次のように示されています。

> 児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。
> （小学校学習指導要領 第１章 総則　第３ 教育課程の実施と学習評価　２ 学習評価の充実）
> （中学校学習指導要領にも同旨）

道徳教育における評価も、常に指導に生かされ、結果的に児童生徒の成長につながるものでなくてはなりません。他者との比較ではなく児童生徒一人一人のよい点や進歩の状況などを把握し、年間や学期にわたって児童生徒がどれだけ成長したのかという視点を大切にすることが重要です。

このことから、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育における評価については、教師が児童生徒一人一人の人間的な成長を見守り、児童生徒自身の自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付ける働きをもつようにすることが求められています。そして、それは教師と児童生徒の温かな人格的な触れ合いに基づいて、共感的に理解されるべきものであるといえます。

また、道徳科の評価については、学習指導要領において次のように示されています。

> 児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。
> （小学校学習指導要領 第３章 特別の教科 道徳　第３ 指導計画の作成と内容の取扱い ４）
> （中学校学習指導要領にも同旨）

道徳科において養うべき道徳性は、児童生徒の人格全体に関わるものであり、数値などによって不用意に評価してはならないことを特に明記しています。

こうした点を踏まえ、それぞれの授業における指導のねらいとの関わりにおいて、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童生徒の成長を促すとともに、それによって自らの指導を評価し、改善に努めることが大切です。

2　道徳科における児童生徒の学習状況及び成長の様子についての評価

道徳科の評価の考え方については、「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」第５章第２節に示されています（中学校も同様）。まとめると、次の通りです。

・数値による評価ではなく、記述式とすること。
・個々の内容項目ごとではなく、大くくりなまとまりを踏まえた評価とすること。
・他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行うこと。
・学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること。
・発達障害等のある児童生徒が抱える学習上の困難さの状況等を踏まえた指導及び評価上の配慮を行うこと。
・調査書に記載せず、入学者選抜の合否判定に活用することのないようにすること。

評価の基本的な考え方と個人内評価としての見取り

児童生徒の評価について、内面的資質である道徳性がどのように養われたか否かは、授業のみで容易に判断できるものではないことから、評価の対象となるのは、児童生徒の道徳性ではなく、道徳性を養うための学習状況です。学習状況を適切に把握するに当たって、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度のそれぞれについて分節し、学習状況を分析的に捉える観点別評価を通じて見取ろうとすることは、道徳科の評価としては妥当ではありません。そのため、学習状況の評価について「観点」ではなく、「視点」という言葉が、「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」の中で用いられています。

児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子をどのように見取り、記述するかということについては、学校や児童生徒の実態に応じて、学習指導過程や指導方法の工夫と併せて適切に考える必要があります。

児童生徒が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうかという点については、例えば、道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしていることや、自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしていること、複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしていることを発言や感想文、質問紙の記述等から見取るという方法が考えられます。

道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうかという点についても、例えば、読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしていることに着目したり、現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目したりするという視点も考えられます。また、道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めているかや、道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしているかという視点も考えらます。

また、児童生徒が、教師や他の児童生徒の発言に聞き入ったり、考えを深めようとしたりしている姿に着目するなど、発言や記述ではない形で表出する児童生徒の姿に着目するということも重要になります。

さらに、年間や学期を通じて、当初は感想をそのまま書いただけであった児童生徒が、学習を重ねていく中で、登場人物に共感したり、自分なりに考えを深めた内容を書くようになったりすることや、既習の内容と関連付けて考えている場面に着目するなど、児童生徒が一定の期間を経て、多面的･多角的な見方へと発展していたり、道徳的価値の理解が深まったりしていることを見取るという視点もあります。

ここに挙げた視点は例示であり、道徳科の評価の趣旨を理解した上で、学校の状況や児童生徒の状況を踏まえた評価を工夫することが求められています。

3　道徳科の授業に対する評価

道徳科においても、教師が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かしていくことが大切であり、授業の評価を改善につなげる過程を一層重視する必要があります。

授業に対する評価の基本的な考え方

授業に対する評価と改善を行う上で、学習指導過程や指導方法を振り返り評価し、その評価を授業の中で更なる指導に生かすことが重要になります。明確な意図をもって指導の計画を立て、授業の中で予想される具体的な児童生徒の学習状況を想定し、授業の振り返りの観点をもつことで、指導と評価の一体化が実現することになります。

道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点はそれぞれの授業によって、より具体的なものとなりますが、その観点としては、次のようなものが考えられます。

ア　学習指導過程は、道徳科の特質を生かし、道徳的（諸）価値の理解を基に自己を見つめ、自己（人間として）の生き方について考えを深められるよう適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものとなっていたか。

イ　発問は、児童（生徒）が（広い視野から）多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか。

ウ　児童（生徒）の発言を傾聴して受け止め、発問に対する児童（生徒）の発言などの反応を、適切に指導に生かしていたか。

エ　自分自身との関わりで、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。

オ　ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、児童（生徒）の実態や発達の段階にふさわしいものであったか。

カ　特に配慮を要する児童（生徒）に適切に対応していたか。

（「小学校学習指導要領（平成２９年告示）解説　特別の教科　道徳編」より抜粋、（　）内は中学校）

評価を指導の改善に生かす工夫と留意点

児童生徒の道徳性を養う質の高い授業を創造するためには、学習指導過程や指導方法の改善に役立つ多面的・多角的な評価を心掛ける必要があります。また、道徳科の授業で児童生徒が伸びやかに自分の感じ方や考え方を述べたり、他の児童生徒の感じ方や考え方を聞いたり、様々な表現ができたりするのは、日々の学級経営と密接に関わっています。

また、児童生徒の道徳性に係る成長の様子に関する評価においては、慎重かつ計画的に取り組む必要があります。道徳科は、児童生徒の人格そのものに働きかけるものであるため、その評価は安易なものであってはなりません。児童生徒のよい点や成長の様子などを積極的に捉え、それらを日常の指導や個別指導に生かしていくよう努めなくてはならないといえます。

2 実践事例

(1) 小　学　校

① **低学年・第１学年** …… 6
内容項目：B-(7)　親切、思いやり
教材名：「くりの　み」（光村図書「道徳１　きみがいちばんひかるとき」）

② **中学年・第４学年** …… 10
内容項目：C-(13)　勤労、公共の精神
教材名：「琵琶湖のごみ拾い」（光村図書「道徳４　きみがいちばんひかるとき」）

③ **高学年・第５学年** …… 14
内容項目：C-(14)　勤労、公共の精神
教材名：「クール・ボランティア」（光村図書「道徳５　きみがいちばんひかるとき」）

(2) 中　学　校

① **第１学年** …… 18
内容項目：A-(1)　自主、自律、自由と責任
教材名：「裏庭での出来事」（光村図書「中学道徳①　きみがいちばんひかるとき」）

② **第２学年** …… 22
内容項目：B-(6)　思いやり、感謝
教材名：「気づかなかったこと」（光村図書「中学道徳②　きみがいちばんひかるとき」）

③ **第３学年** …… 26
内容項目：D-(19)　生命の尊さ
教材名：「命の選択」（光村図書「中学道徳③　きみがいちばんひかるとき」）

小学校
第1学年

主題名　やさしいきもちえ
教材名　「くりの　み」

（光村図書　「道徳１　きみがいちばんひかるとき」）

主題構成表

■内容項目
Ｂ－（７）親切、思いやり
　身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること。

■価値の分析
・よりよい人間関係を築く上で、相手に対する思いやりの心をもち親切にすることは求められる基本的姿勢である。
・相手の立場を考えたり気持ちを想像したりして、励ましや援助をするなど、相手のことを親身になって考えようとする態度を育てることが期待される。
・学校生活の中で、学校の人々や友達など多様な人々と関わり合いをもたせたり、地域の方や家族の考えや親切な行動に気付かせたりすることで、相手の思いやりの心に気付き、相手に優しく接することができるようにすることが求められる。

■内容項目から見た児童の実態
・誰かが困っていたら駆け寄ったり、助けたりするなど、相手に優しく接することができる姿が見られる。
・発達の段階により、自分中心の考え方や行動をしてしまう姿も見られる。

■要因
・自分がしたことによって、相手がどのような気持ちになっているかまで考えることに弱さがある。
・相手の親切な行動に対して、その行動が自分のことを思って温かい心で接してくれているということに気付いていない。

■教材の分析
・たくさんのどんぐりをおなか一杯食べ、残りは誰にも見つからないように落ち葉で隠し、「全然見つからなかったよ。」嘘をついたきつねは、二つしか見つけらなかったくりのうち、一つを自分にくれたうさぎの行動に涙を流す。
・自分のことだけを考えているきつねの気持ちに共感しながらも、うさぎの行動から相手を思いやる親切な行動の大切さを考えられる教材である。
・うさぎの行動やその気持ちを感じ涙するきつねの姿から、相手の立場を思いやる親切な行動の価値に気付くことができるようにしたい。
・振り返りでは、相手のことを思いやり、親切な行動をすることの大切さを改めて考え、明日から友達や周りの人のことを思いやって生活しようとする心情を育てたい。

■ねらい
　自分だけでなく相手のことを考える思いやりの心や親切にすることの大切さを考え、友達や周りの人に親切しようとする態度を育てる。

■展開の構想
・困っているときに優しくされたらどんな気持ちになるかについて共通理解する。
・自分のことしか考えていない前半のきつねの弱さに気付くことができるようにする。
・うさぎの親切な行動のよさを知ったきつねの心情から価値を深める。
・自分のことだけを考えて生活するのではなく、相手のことを思いやる大切さに気付き、明日からの自分の生活を考える。

■基本発問（◎中心発問）
○きつねさんが困った顔をして「何も見つかりませんでした。」と言ったのはどうしてでしょう。
○見つけた二つのくりの実のうち一つをあげたうさぎさんはどんな気持ちだったでしょう。
◎くりの実を見ているうちに涙がでてきたきつねさんは、どんなことを考えていたでしょう。
○うさぎさんがしたように、困っている人のために何かしてあげたことはありますか。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目
B－（7）親切、思いやり
　身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること。

【内容項目について大切にしたいこと】

　自分中心の考え方をすることなく、様々な人々と関わりながら、相手の考えや気持ちに気付き、温かい心で接して親切にしようとする態度を育てること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基に、児童生徒の実態から育成したいこと。

【児童の実態と要因】

○**よさ**：友達や先生が困っていたら声をかけたり、自分で気付いて手助けしたりすることができる。
○**課題**：自己中心的な行動も多く、相手や周りのみんながどう思っているかまで考えられない。
○**要因**：「誰かの役に立ちたい。」という気持ちが育ってきているが、単発的な行動が多く相手の気持ちを意識した行動が持続できない。

【実態から育成したいこと】

　相手の気持ちを考え、親切にできることのよさや、思いやりをもって人と接することの大切さを実感できるようにし、友達や周りの人に親切にしようとする態度を育てること。

ポイント

3 「考え、議論したいこと」

「価値の分析」「実態と要因の分析」を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

考え、議論したいこと

　うさぎの親切な行いの中にある相手を思いやる気持ちの大切さや価値。

ポイント

4 「教材の分析」

考え、議論したいことに基づき、１時間の学習で教材をどのように活用するのか構想します。

どこで考え、議論するか

　うさぎがきつねにくりの実をあげ、もらったきつねが涙を流す場面。（きつねになりきって役割演技をする場）

あらすじ

・どんぐりをたくさん見つけたきつねが、自分で全て食べるために、「一つも見つけられなかった。」と、うさぎに嘘をついた。
・うさぎはそれを信じ、きつねをかわいそうに思って、二つしか見つけられなかったくりの実のうち、一つをきつねにあげた。
・きつねは、くりの実を見ているうちに涙が出てきた。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】

　自分だけでなく相手のことを考える思いやりの心や親切にすることの大切さを考え、友達や周りの人に親切しようとする態度を育てる。

6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫
・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

本時の展開

	基本発問と予想される児童の反応	指　導・援　助
導入	1　教材に関心をもち、課題を確認する。 ○困っていた時に優しくされたら、どんな気持ちになりますか。 ・うれしい。・温かい気持ちになる。・ありがとう。	・自分が困っていた時という場面で、親切にされた経験を想起させることで、本時の価値に迫れるようにする。
展開前段	2　範読を聞き、思いやりのある親切な行動について話し合う。 ○きつねさんが困った顔をして「何も見つかりませんでした。」と言ったのはどうしてでしょう。 ・うさぎさんにあげると自分の分がなくなってしまうので、あげたくなかったから。 ・自分がたくさん実を隠したことを知らないから。 ○見つけた二つのくりの実のうち一つをあげたうさぎさんは、どんな気持ちだったでしょう。 ・きつねさんが困っているから助けてあげたい。 ・くりの実をあげたら、きつねさんは喜ぶだろうな。 ◎くりの実を見ているうちに涙が出てきたきつねさんは、どんなことを考えていたでしょうか。 ＜役割演技＞ 先生（うさぎ） 「やっと二つ見つけたのです。一つあなたにさしあげましょう。」 児童（きつね） ・ありがとう。うさぎさんはやさしいな。 ・隠さずあげればよかったな。ごめんなさい。 **【深めの発問】** きつねさんはどうして涙が出てきたのでしょうか。 ・自分はたくさん見つけたのに、うさぎさんに嘘をついてしまったことを悪かったと思っているから。 ・うさぎさんは自分のことを思って、二つしかないうちの一つをくれたから。 ・うさぎさんの優しさや親切がうれしかったから。 ・相手に親切にすることが大切だと気付いたから。	・「きつねさんがしたことについて、『あれ、いいのかな。』と思うところはありますか。」と問い、きつねの弱い部分を引き出してについて共通理解する。 ・たくさんの実を見つけてうれしい気持ちや、ひとりじめをしたいという気持ちに共感しながら、自分のことしか考えていない、きつねの自己中心的な様子を押さえる。 ・きつねのことを思って二つしかないくりの実を一つあげたうさぎの行動から、うさぎの相手を思いやる気持ちを確認する。 ・「ごめんなさい。」や「ありがとう。」という言葉だけが出てきた場合、「続けて言葉を言うとしたら何と言いますか。」と問い返し、考えを深められるようにする。 ・仲間の意見に「なるほど」と思うところはないかを問い、仲間の意見を聞いて、どの気持ちが強くなったかを引き出す。 ・「悪いことをしたから涙が出たのですか。」と補助発問をして、きつねの涙が反省の涙だけでなく、うさぎの相手を思いやる親切な行動への気付きなど、多様な感情があふれてきた涙であることに押さえるとともに、きつねが、相手に親切にすることの大切さに気付いたことを理解できるようにする。 **【評価の視点】** **役割演技などを通して、思いやりをもって接することの大切さについて理解している。** ①
展開後段	3　自分自身を振り返り、これまでの生活について考える。 ○うさぎさんがしたように、困っている人のために何かしてあげたことはありますか。 ・転んで泣いていた子がいたから、かわいそうだと思って、保健室に連れて行ってあげたよ。 ・友達が持っていた荷物を一緒に運んだよ。 ・助けてあげたときにとても喜んでくれてうれしかったよ。これからも困っている人には自分から声をかけて親切にしたいな。	・親切・思いやりの価値を振り返る姿や、今後も相手の気持ちになって親切にしたいという気持ちを価値付ける。 ・「その時、あなたはどんな気持ちになりましたか。」と親切にした時の気持ちを尋ね、自己見つめができるようにする。 **【評価の視点】** **困っている人にどんなことができるかを考え、相手に対して親切にしようと考えている。** ②
終末	4　教師の説話を聞く。	・学級での「よさ見つけ」の言葉や、保護者の方の言葉を紹介し、相手のことを考えた親切な行動は、相手も自分も嬉しくなったり心が温かくなったりすることに気付くことができるようにして、友達や周りの人に親切にしようとする意欲を高める。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

自分だけでなく相手のことを考える思いやりの心や親切にすることの大切さを考え、友達や周りの人に親切しようとする態度を育てる。

評 価

ポイント

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

【評価の視点】
① 役割演技などを通して、思いやりをもって接することの大切さについて理解している。

【評価の視点】
② 困っている人にどんなことができるかを考え、相手に対して親切にしようと考えている。

ポイント

2 「児童生徒の姿・発言」を想定する

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

想定する「具体的な児童生徒の姿・発言」（役割演技を通して）

①うさぎさんはくりの実が二つしかないのにきつねさんにあげたから、とても優しいな。きつねさんのことを考えて親切にしたのだな。自分だけでなく相手のことを考えて親切にすることは大切だな。

②助けてあげたときにとても喜んでくれて嬉しいな。これからも困っている人には自分から声をかけて親切にしたいな。

ポイント

3 「評価の視点」に迫るための指導の工夫

【評価の視点】に迫るために、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

発問の工夫 ①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」ができるようにするために…

発問「くりの実を見ているうちに涙が出てきたきつねさんは、どんなことを考えていたでしょう。」

・うさぎの優しさや、自分が実をあげなかったことへの謝罪の気落ちを引き出す。

深めの発問「きつねさんはどうして涙が出てきたのでしょうか。」

・きつねの涙が反省の涙だけでなく、うさぎの相手を思いやる親切な行動への気付きなど、多様な感情があふれてきた涙であることに押さえるとともに、きつねが、相手に親切にすることの大切さに気付いたことを理解できるようにする。

学習活動の工夫 ②

「自己を見つめること」ができるようにするために…

・「うさぎさんがしたように、困っている人のために何かしてあげたことはありますか。」と問うことで、これまでに行った親切なふるまいに価値を見出すことができるようにする。1年生という発達段階を踏まえ、前向きに自分の経験を振り返ることができるよう配慮する。

指 導

小学校
第4学年

主題名　気持ちよく働く
教材名　「琵琶湖のごみ拾い」
（光村図書「道徳４　きみが　いちばん　ひかるとき」）

主題構成表

■内容項目
C－(13) 勤労、公共の精神
　働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと。

■価値の分析
・一人一人が働くことのよさや大切さを知ることにより、みんなのために働こうとする意欲をもち、社会に対する奉仕や公共の役に立つ喜びを味わうことができる。
・自分の役割を果たし、力を合わせて仕事をすることの大切さを理解できるようにするとともに、進んで働こうとする態度を育てる必要がある。
・身の回りの生活の中で、集団の一員としてできることについて考え、自分ができる仕事を見付けたり、集団生活の向上につながる活動に参加したりして、みんなのために働こうとする意欲や態度を育むことが重要になる。

■内容項目から見た児童の実態
・自分の係の仕事ができていると感じている子が多い。
・学級の仲間の係を進んで手伝ったり、みんなのために進んで行動しようとしたりする姿は少ない。

■要因
・当番活動や係の仕事など、自分が働くことがみんなの役に立っているということに気付いていない。
・みんなのために働くことの楽しさや喜びを実感していない。

■教材の分析
・主人公のすみ太が作文に書いた、琵琶湖のごみ拾いをしているおじいさんの思いを知った学級の仲間は、みんなが使う場所である琵琶湖を自分たちできれいにしようとごみ拾いに取り組む。
・おじいさんの言葉、すみ太や学級の仲間の行動や思いを考えることで、進んで働こうとする意欲を高められる教材である。
・おじいさんの言葉や行動から働くことのよさや価値について理解するとともに、ごみ拾いをして気持ちがよくなった理由を考えることで、進んで働くことは充実感につながることや働くことはみんなの役に立つことに気付くことができるようにし、みんなのために進んで働こうとする意欲や態度を育てたい。

■ねらい
　自分から進んで働くことで得られる充実感や働くことのよさを理解し、みんなのために進んで働こうとする実践意欲と態度を育てる。

■展開の構想
・学校にいるみんながどんな気持ちで働いているか確認する。
・「琵琶湖のごみ拾い」を読み、すみ太の気持ちについて「分かるな。」「どうしてかな。」と思う部分について考え、ごみを拾うことに対して嫌な気持ちがあることを捉える。
・おじいさんの言葉から、おじいさんが働くことに楽しさを感じたり琵琶湖がきれいになることに喜びを感じたりいていることを押さえる。
・すみ太やみんなが、ごみを拾って気持ちよくなった理由を話し合う。
・これまでの自分の係や活動に取り組む時の気持ちを振り返り、話し合う。

■基本発問（◎中心発問）
○すみ太は、ごみを拾うことについてどう思っていましたか。
○すみ太は、おじいさんの言葉にどうしてびっくりしたのでしょうか。
◎すみ太やみんなは、ごみを拾って、どうして気持ちがよくなったのでしょうか。
○自分の係の活動について、これまでの自分を振り返ってみましょう。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目
C－(13) 勤労、公共の精神
　働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと。

【内容項目について大切にしたいこと】
　自分の役割を果たし、力を合わせて仕事をすることや、みんなのために働くことのよさや大切さを理解し、集団の一員としてみんなのために進んで働こうとする意欲や態度を育むこと。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基に、児童生徒の実態から育成したいこと。

【児童の実態と要因】
○**よさ**：自分の係の仕事に取り組むことができる。
○**課題**：仲間のために行動しようとしたり、仲間の仕事を手伝おうとしたりする姿が少ない。
○**要因**：仕事は「やらなければいけないもの」だという認識であり、働くことの意義や、誰かの役に立っているという喜びを自覚できていない。

【実態から育成したいこと】
　みんなで力を合わせて働くことや、みんなのために働くことのよさや大切さを理解し、進んでみんなのために働こうとする意欲や態度を育むこと。

ポイント

3 「考え、議論したいこと」

「価値の分析」「実態と要因の分析」を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

考え、議論したいこと

進んでみんなのために働くことのよさ。

ポイント

4 「教材の分析」

考え、議論したいことに基づき、１時間の学習で教材をどのように活用するのか構想します。

どこで考え、議論するか

　すみ太やみんなが、ごみを拾って気持ちがよくなった場面。

あらすじ

- 主人公のすみ太は、登校中に琵琶湖でごみ拾いをしているおじいさんを見かける。
- おじいさんは「琵琶湖のごみを一つ拾えば、その分一つ琵琶湖がきれいになる。それが楽しみだ。」と考えてごみ拾いをしていることを知る。
- その言葉に感銘を受けたすみ太は作文でクラスのみんなに紹介する。
- それに賛同した仲間は、クラス総出で琵琶湖のゴミ拾いをして、清々しさを感じる。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】
　自分から進んで働くことで得られる充実感や働くことのよさを理解し、みんなのために進んで働こうとする実践意欲と態度を育てる。

6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫
・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

本時の展開

	基本発問と予想される児童の反応	指　導・援　助
導入	1　教材に関心をもち、課題を確認する ○学校や家族のみんなにどんな働きかけをしていますか。 ・○○係・給食当番・掃除・兄弟のお世話	・アンケートの結果を提示して様々な考えを知り、価値への方向付けをする。 ・気持ちよく働くために大切なことを考え、自分を見つめることを学習課題として伝える。
展開前段	2　範読を聞き、すみ太の気持ちを話し合う ○すみ太は、ごみを拾うことについてどう思っていましたか。 ・誰かが拾うから拾わなくていい。 ・そのうちに波に流されてなくなるだろう。 ・自分が捨てたわけではないから拾わなくてもよい。 ○すみ太は、おじいさんの言葉にどうしてびっくりしたのでしょうか。 ・自分は「きたない」と思っているのに、おじいさんは「いやじゃない」と言っているから。 ・おじいさんは、ごみを拾うことで琵琶湖がきれいになるから楽しみだと言っているから。 ◎すみ太やみんなは、ごみを拾って、どうして気持ちがよくなったのでしょうか。 ・自分たちで何が必要かを考えて動いたから。 ・自分もみんなも一生懸命にごみを拾い続けたから。 ・琵琶湖がきれいになっていくことがうれしいから。 **【深めの発問】** ごみ拾いはすみ太やみんなの仕事ではないのに、どうして進んでごみ拾いをしたのでしょう。 ・琵琶湖が汚くなるのは嫌だし、誰かがやらないと琵琶湖がどんどん汚れてしまうから。 ・自分たちの地域だから自分たちできれいにしなくてはいけないと思ったから。 ・おじいさんの活動のよさや大切さに気付いたから。	・範読をする際に、すみ太の考えや行動について共感できるところや、疑問に思うところを見つけながら読むように指示を出し、人間理解と価値理解の場面に気付くことができるようにする。 ・ごみを拾わないというすみ太の考え方や感じ方を引き出して板書で整理する。 ・「すみ太やおじいさんの気持ちについてはどう思うか。」と問いかけ、自分との関わりで考えることができるようにする。 ・おじいさんの言葉から、おじいさんが、みんなの琵琶湖をきれいにしようと思って進んで行動していることや、気持ちよく働いていることを押さえる。 ・自分たちで考え、進んで誰かのために働いたことで、すみ太の心の中に満足感や充実感、達成感、使命感などが芽生えていることに気付くことができるようにする。 ・「なるほど」と思うところを問い、自分の最初の考えから大切な考えが加わったことに気付くことができるようにする。 ・「すみ太たちがやらなくてもよいのではないか。」と補助発問をし、自分たちから行動したことや、進んでみんなのために働くことのよさについて考えることができるようにする。 **【評価の視点】** **進んでみんなのために働くことのよさについて考えている。** ①
展開後段	3　自分自身のこれまでの生活について振り返る。 ○自分の係や活動について、これまでの自分を振り返ってみましょう。 ・給食当番の時、早く準備を始めたら、みんなが食べきることができて嬉しかったし気持ちがよかった。 ・近所のごみ置き場にごみが散らかっていたので掃除をしたら、地域の人がとても喜んでくれた。 ・自分から進んで働くことは、周りの人にも喜んでもらえるし、自分も気持ちよく過ごせる。自分が過ごす場所の環境をよくするために、今よりももっと、自分から進んで働いていきたい。	・これまでの生活を見つめ直し、自分から進んで働くことで、他者が喜んでくれたり、自己の達成感や充実感につながったりしていることを実感できるようにし、自分たちの生活する場所をよくするために、みんなのために進んで働こうとする気持ちを高める。 **【評価の視点】** **進んで働くことについて、これまでの自分自身の体験を想起しながら自己を見つめている。** ②
終末	4　教師の説話を聞く	・家庭でのお手伝いや日常の働きに関して、保護者や先生方の言葉を紹介して、進んで働くことのよさを再確認する。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

自分から進んで働くことで得られる充実感や働くことのよさを理解し、みんなのために進んで働こうとする実践意欲と態度を育てる。

評 価

ポイント

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

【評価の視点】
① 進んでみんなのために働くことのよさについて考えている。

【評価の視点】
② 進んで働くことについて、これまでの自分自身の体験を想起しながら自己を見つめている。

ポイント

2 「児童生徒の姿・発言」を想定する

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

想定する「具体的な児童生徒の姿・発言」（役割演技を通して）

①自分たちの地域だから自分たちできれいにしようとすることは大切だし、進んで働いたことで地域の役に立てている。だからこそ、充実感を得られる。進んでみんなのために働くことは大切だな。

②自分からみんなのために働いたことで、喜んでもらえてすごくうれしいし、自分も気持ちよく過ごすことができる。これからも、もっと、進んでみんなのために働いていきたい。

ポイント

3 「評価の視点」に迫るための指導の工夫

【評価の視点】に迫るために、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

発問の工夫 ①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」ができるようにするために…

発問「すみ太やみんなが、ごみを拾って気持ちがよくなったのはどうしてでしょう。」

・自分から進んで動いたことで達成感や満足感が芽生えたことに気付くことができるようにする。

深めの発問「ごみ拾いはすみ太やみんなの仕事ではないのに、どうして進んでごみ拾いをしたのでしょう。」

・自分たちから行動したことや、進んでみんなのために働くことのよさについて考えることができるようにする。

学習活動の工夫 ②

「自己を見つめること」ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

・日常生活での仲間の姿や「よさ見つけ」の言葉、一家庭一ボランティアの保護者のコメントや、学級で奉仕活動をした際の先生からの言葉等を紹介し、進んで働くことのよさや価値を自身の行動と重ねて振り返り、これからも自分や仲間のために進んで働こうとする気持ちを高める。

指 導

小学校
第５学年

主題名　社会に役立つとは
教材名　「クール・ボランティア」
（光村図書「道徳５ きみが いちばん ひかるとき」）

主題構成表

■内容項目
C－(14) 勤労、公共の精神
　働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し、公共のために役立つことをすること。

■価値の分析
・仕事に対して誇りや喜びをもち、働くことや社会に奉仕することの充実感を通して、みんなのために働くことの意義を理解し、自分の役割を積極的に果たそうとする態度を育成することが重要である。
・仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して、汗を流すことの尊さや満足感、仕事を成し遂げた際の喜びや手応えなど、働く意義や社会に奉仕する喜びを体得させ、進んで実践しようとする意欲や態度を養うことが必要である。
・勤労が自分のためだけでなく、社会生活を支えるものであることを考えさせ、公共のために役立とうとする態度を育てることが望まれる。

■内容項目から見た児童の実態
・自ら進んで地域のボランティア活動に参加した経験が少ない。
・地域の行事や活動において、自分の好きな仕事や、気の合う仲間との活動は取り組むことができる。

■要因
・自分が地域のために働いたことで、地域の方々がどのように思っているかということに気付いていない。
・好きな活動や得意な活動は楽しく充実感を感じやすいため参加するが、「勤労は自分のためだけではなく社会生活を支えるものである」という見方はできていない。
・働くことや社会に奉仕することの意義ややりがいについて深く考えることに弱さがある。

■教材の分析
・主人公の信二にとって、ボランティア活動は青年海外協力隊のような大掛かりな活動であり、「クール・ボランティア（かっこいいボランティア）」であった。
・主人公は、憧れの西田さんから歩道橋のボランティア掃除に誘われ、一生懸命に汗を流し活動するうちに、働くことに喜びを感じ、ボランティアは、自分も気持ちよく過ごすために大切なことだと気付いていく。その行動や心の変容を基に、働くことや奉仕することの意義ややりがいについて理解を深められる教材である。
・ボランティア活動は、社会の役に立つ活動であることや、社会の役に立つ喜びや充実感を味わえる活動であることに気付くことができるよう、働く意義や奉仕する喜びについて考え、公共のために役立とうとする態度を育てたい。

■ねらい
　ボランティア活動の意義ややりがいについて考え、活動が周りの人の役に立ち、自分にとっても充実感を味わえる活動になることに気付き、自ら公共のために役立とうとする実践意欲や態度を育てる。

■展開の構想
・学級の児童の「ボランティア活動に対する思い」について共有する。
・西田さんと出会う前の主人公のボランティア活動に対する思いについて共感できるようにする。
・ボランティア活動が、自分にとっても周りの人にとっても気持ちのよい活動になっていることに気付けるようにする。
・ボランティア活動の意義ややりがいについて考え、今後、自ら公共のために役立とうという実践意欲を育てる。

■基本発問（◎中心発問）
○信二のボランティアへの思いで、共感できるところはどこでしょう。
○「どうせやるなら、かっこいいほうがいい。」と言った信二が思っているボランティアとはどんなものでしょう。
◎「これがクール・ボランティアだよ。」と言われた信二が気付いたことは何でしょう。
○ボランティア活動について、これまでの自分を振り返ってみましょう。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目

C－(14) 勤労、公共の精神

働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し、公共のために役立つことをすること。

【内容項目について大切にしたいこと】

働くことや社会に奉仕する活動が、社会の役に立ち、自分にとっても充実感を味わえる活動になることを理解し、進んで公共のために役立とうとする態度を育てること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基に、児童生徒の実態から育成したいこと。

【児童の実態と要因】

○**よさ**：自分の決められた仕事に対し、進んで取り組むことができる児童が多い。

○**課題**：自らボランティア活動に参加したり、仲間の仕事を手伝ったり、自分の役割以外の活動に進んで取り組んだりすることは少ない。

○**要因**：働くことや社会に奉仕することについて、充実感を味わったり、活動の意義ややりがいについて深く考えたりする経験がない。

【実態から育成したいこと】

ボランティア活動の意義ややりがいについて考える活動を通して、ボランティア活動やこれまで取り組んできたことのある係活動等が、周りの人の役に立ち、自分にとっても充実感を味わえる活動であることに気付き、自ら公共のために役立とうとする実践意欲や態度を育てること。

ポイント

3 「考え、議論したいこと」

「価値の分析」「実態と要因の分析」を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

考え、議論したいこと

・ボランティア活動の意義とやりがい。

・その活動を通して、充実感が味わえる理由。

ポイント

4 「教材の分析」

考え、議論したいことに基づき、１時間の学習で教材をどのように活用するのか構想します。

どこで考え、議論するか

西田さんに「これがクール・ボランティアだよ。」と言われたときの信二の気持ちを考える場面。

あらすじ

・主人公の信二は、ボランティア活動を「どうせやるなら、かっこいい方がいい。」と考えている。

・学校の帰りに青年海外協力隊でボランティア活動をしてきた西田さんに会い、西田さんのようなボランティアが「クール・ボランティア」だと捉えている。

・憧れの西田さんが歩道橋掃除のボランティアをしている姿を見て、自分も一緒にやり、働く喜びを感じる。

・歩道橋の掃除をしている際に、西田さんに「これがクール・ボランティアだよ。」と言われ、ボランティア活動の意義ややりがいについて深く考える。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】

ボランティア活動の意義ややりがいについて考え、活動が周りの人の役に立ち、自分にとっても充実感を味わえる活動になることに気付き、自ら公共のために役立とうとする実践意欲や態度を育てる。

6 「本時の展開の構想」

学習指導過程の工夫
指導方法の工夫
発問の工夫・学習活動の工夫　など

本時の展開

	基本発問と予想される児童の反応	指　導・援　助
導入	1　アンケート結果を提示し、課題を明らかにする。 ○どんなボランティア活動に取り組んだことがありますか。 ・資源回収、雑紙回収、地域清掃、挨拶運動など	・アンケート結果を提示し、ボランティア活動に対する思いを視覚的に捉えられるようにする。 ・アンケートの結果を基に、本時はボランティア活動を行う意義を考えたり、自分にはどんなことができそうかという視点で自己を見つめたりしていくことを確認する。
展開前段	2　範読を聞き、主人公のボランティアに対する気持ちの変化を話し合う。 ○信二のボランティアへの思いで、共感できるところはどんなところですか。 ・「ボランティアはかっこいい。」と思っているところ。 ・やるなら大掛かりな活動をしたいと思うところ。 ○「どうせやるなら、かっこいいほうがいい。」と言った信二が思っているボランティアとはどんなものでしょう。 ・目立つ活動で、人から認められるもの。 ・西田さんのように世界で活動ができるようなもの。 ・大々的な活動、大掛かりな活動。 ◎「これがクール・ボランティアだよ。」と言われた信二が気付いたことは何でしょう。 ・大掛かりなボランティアがかっこいいボランティアというわけではない。 **【深めの発問】** 信二が額に汗を浮かばせるほど、歩道橋の掃除に取り組んだのはどうしてでしょう。 ・きれいになったところを見ると、自分もうれしいから。 ・みんなのために働くことが気持ちよかったから。 ・自分から掃除をして歩道橋がきれいになっていくことで、充実感を味わったから。 ・ボランティアをすることで、自分もみんなも気持ちよく過ごせることに気付いたから。	・範読をする前に、「青年海外協力隊」の活動の写真を示し、西田さんの海外での活動をイメージできるようにする。 ・人間理解と価値理解の場面を見付けられるようにするために、主人公の気持ちに共感できるところに視点を当てて、話（範読）を聞くよう声をかける。 ・ボランティア活動に対する考え方を多様に引き出してから、「あなたはどの考えに一番近いですか。」と問い、自分との関わりを意識しながら考えられるようにする。 ・自分中心で考えるのではなく、他者の気持ちや社会のために活動しようとする思いが、ボランティア活動にとって大切であると気付くことができるように、信二がはじめに考えていたボランティアと比較する。 ・「なるほど」と思うところを問い、自分の最初の考えから大切な考えが加わったことに気付くことができるようにする。 ・深めの発問をすることで、ボランティア活動は、社会の役に立つ活動であることや、社会の役に立つ喜びや充実感を味わえる活動であることに気付いた信二の変容を押さえる。 **【評価の視点】** **ボランティア活動の意義ややりがいについて考えている。** ①
展開後段	3　自分自身を振り返り、これからについて考える。 ○ボランティア活動について、これまでの自分を振り返ってみましょう。 ・自分たちがしたことで、地域の人がこんなにも喜んでくれていたなんて嬉しい。 ・ボランティアは自分もみんなも気持ちよく過ごせるようにする活動だから、これからは自分ができる身近なボランティアに積極的に参加して、誰かの役に立てるようになりたい。	・これまでの地域清掃や挨拶運動などのボランティア活動の様子や、児童の振り返り、地域の方からの言葉を紹介し、活動の意義や価値を基に自己を見つめることができるようにする。 **【評価の視点】** **社会に奉仕することのやりがいについてこれまでの自分自身を振り返り、公共のために役立つにはこれから何を大切にすればよいかを考えている。** ②
終末	4　教師の説話を聞く。	・実際にボランティア活動を行っている方がどのような思いで参加しているのかについて、学林管理委員会の方のインタビューを流すことで、学校の活動も地域の方に支えられていることを知り、自分達も地域の方のために何かできないか考え行動しようとする意欲を高める。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

ボランティア活動の意義ややりがいについて考え、活動が周りの人の役に立ち、自分にとっても充実感を味わえる活動になることに気付き、自ら公共のために役立とうとする実践意欲や態度を育てる。

評価

ポイント

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

【評価の視点】
① ボランティア活動の意義ややりがいについて考えている。

【評価の視点】
② 社会に奉仕することのやりがいについて、これまでの自分自身を振り返り、公共のために役立つにはこれから何を大切にすればよいかを考えている。

ポイント

2 「児童生徒の姿・発言」を想定する

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

想定する「具体的な児童生徒の姿・発言」

①ボランティア活動は、みんなのためになる活動というだけでなく、活動することで気持ちよく感じたり充実感が生まれたりする。自分もみんなも気持ちよく過ごせる活動だということが分かった。

②地域のために活動したことで地域の人も喜んでくれてとてもうれしいし、気持ちがよい。これからは自分にできる身近なボランティアに積極的に参加して、もっと誰かの役に立てるようになりたい。

ポイント

3 「評価の視点」に迫るための指導の工夫

【評価の視点】に迫るために、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

発問の工夫 ①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」ができるようにするために…

発問「『これがクール・ボランティアだよ。』と言われた信二が気付いたことは何でしょう。」

・これまで自分が考えていた「クール・ボランティア」との違いを捉えられるようにする。

深めの発問「信二が額に汗を浮かばせるほど、歩道橋の掃除に取り組んだのはどうしてでしょう。」

・ボランティア活動は、みんなのためになる活動ということだけでなく、役に立つことへの喜びや、充実感を味わえる活動であることに気付いた信二の変容を押さえる。

学習活動の工夫 ②

「自己を見つめること」ができるようにするために…

○これまでの地域清掃や挨拶運動などのボランティア活動の様子や、児童の振り返り、地域の方からの言葉を紹介する。

・活動したことで、誰かの役に立っていることや喜んでもらえていることを知り、自分もみんなも気持ちよく過ごせるようにする活動に積極的に参加したいという意欲を高める。

○ゲストティーチャーから「ボランティア活動に対する思い」について聞く。

・地域でボランティア活動を行っている学林委員さんの思いを知ることで、ボランティア活動の意義ややりがいについて再認識できるようにする。

指導

中学校
第1学年

主題名　責任ある生き方とは
教材名　「裏庭での出来事」

（光村図書「中学道徳① きみがいちばんひかるとき」）

主題構成表

■内容項目
A－(1) 自主、自律、自由と責任
　自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。

■価値の分析
・「自律」とは、他からの命令等を待たず、自分の内に自ら規律を作り、それに従って行動しようとするような、自分の内部に自らの規律を作ることに焦点がある。
・「自主」は、他人の干渉等にとらわれず、善悪に関わる物事に対して、自分で最終的に決めるような、外部に対し自分の力で決定することに焦点がある。
・自己の気高さに気付き、望ましい行動をとれるようにするためには、物事の善悪について自ら考え、判断し、決定したことに対して責任をもつことを実感的に捉えることができるようにすることが必要である。
・自らを律し、自分や社会に対して常に誠実でなければならないことを自覚し、人間としての誇りをもった、責任ある行動がとれるように指導することが大切である。

■内容項目から見た児童の実態
・日常生活の中で何が正しく、何が誤りであるのかを理解し、よりよい生活をしようと意識している生徒が多い。
・周りの言動に流され、自分の行動が及ぼす結果を深く考えなかったり、自分が決めた言動に対して、言い訳をしてしまい、責任をもつことができなかったりするときがある。

■要因
・自分の意志があっても、より楽な方、楽しい方へ気持ちが流されてしまう一面がある。
・善悪の判断はついているが、周囲と自分との関わり等を気にして自分が正しいと思うことに向き合うことができない。
・自分の言動には責任が発生するということについて、深く悩んだり、考えたりすることに弱さがある。

■教材の分析
・主人公(健)は、友達に誘われ、ボール遊びを行うにはふさわしくない裏庭でボールを蹴り、ガラスを割ってしまう。正直に話した友人(雄一)に対し、その場で自分も窓ガラスを割ってしまったことを伝えることができなかった主人公だが、自分の行為を見つめ、自分のしたことについて先生に報告しようと行動を起こす。自分の弱さを乗りこえ、自分の行動に責任をもつことについて考えることができる教材である。
・ガラスを割ったことをなぜ先生に言えなかったのかを考えることで、主人公の責任を転嫁してしまう心の弱さに気付かせていきたい。
・「ぼくは行く。」と言ったときの主人公の気持ちを考えることで、他の干渉にとらわれず、自ら考え、判断することや、自ら決定したことに対して責任をもつことの大切さに気付かせていきたい。

■ねらい
　周りの仲間に流されてしまった行動であっても、その行動は自分で決断したことであることに気付き、どんな結果であっても、自分の行動や決断に対して責任を取ろうとする態度を育てる。

■展開の構想
・ガラスを割った主人公が事実を言わなかったことから、他者からの誘惑や圧力、自らの保身に負けて、自分で判断することや、自分の行動に責任をもつことができなくなった心の弱さを、自分との関わりで考える。
・自分の行動に責任をもてなかった主人公が、自分の弱さを乗り越えたことに対して、主人公の後悔や事実を話したいという思いを考えることで、自分の行動に責任をもとうとする態度を育てる。
・自ら考え、判断すること、決定したことに対して責任をもつことの重要性について、自分の思いや周知との関わりを振り返り、これからの生活に生かせるようにする。

■基本発問（◎中心発問）
○健は、先生が来たときに、自分もガラスを割ったことをどうして言わなかったのでしょう。
◎健は、どんな思いから、大輔に詰め寄られても「ぼくは行く。」ときっぱりと言ったのでしょう。
○「これまでの自分」「今の自分」「これからの自分」という視点で、自己見つめをしましょう。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目
A－（1）自主、自律、自由と責任
　自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。

【内容項目について大切にしたいこと】
　自己の気高さに気付き、望ましい行動をとれるようにするためには、物事の善悪について自ら考え、判断し、決定したことに対して責任をもつことを実感的に捉えること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基に、児童生徒の実態から育成したいこと。

【生徒の実態と要因】
○**よさ**：日常の中で何が正しく、何が誤りであるのか理解し、よりよい生活をしようと意識している。
○**課題**：周りの言動に流されたり、自分の行動が及ぼす結果を考えなかったりと、責任ある行動を心がけることができないことがある。
○**要因**：善悪の判断はついているが、周囲と自分との関わり等を気にして正しいと思うことに向き合うことができなかったり、楽な方、楽しい方へ気持ちが流されてしまったりする一面がある。

【実態から育成したいこと】
　周りの仲間に流されてしまった行動であっても、その行動は自分で決断したことであることに気付き、どんな結果であっても、自分の決断や行動に対して責任を取ろうとする態度を育てること。

ポイント

3 「考え、議論したいこと」

「価値の分析」「実態と要因の分析」を受け、考え、議論したいことを明確にします。

考え、議論したいこと

　他者からの誘惑や圧力、自らの保身に負けてしまう心の弱さを乗り越え、自ら考え、判断し、決定したことに対して責任を取ろうとすることの大切さ。

ポイント

4 「教材の分析」

考え、議論したいことに基づき、１時間の学習で教材をどのように活用するのか構想します。

どこで考え、議論するか

　健が大輔に詰め寄られても、「ぼくは行く。」ときっぱりと言い、一人で職員室へと向かった場面。

あらすじ

- 昼休みになり、友達から誘われてサッカーをするために裏庭に移動する。不注意から窓ガラスを割ってしまった友達が先生に報告しに行く。
- 友達を待っている間に主人公も窓ガラスを割ってしまう。しかし、その場で先生に自分のしたことを伝えることができなかった。
- 次の日、友達に自分の決意を伝え、自分のしたことを報告するために一人で職員室に向かうことにした。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】
　周りの仲間に流されてしまった行動であっても、その行動は自分で決断したことであることに気付き、どんな結果であっても、自分が判断し、決断したことに対して責任を取ろうとする態度を育てる。

6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫
・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

本時の展開

	基本発問と予想される生徒の反応	指　導・援　助
導入	1　価値に関わる自分の行動や考えを振り返る。 ・校庭ではゆっくり遊べない。どこで遊んでもいい。 ・人に迷惑をかけなければどこで遊んでも悪くない。 ・遊ぶにはふさわしくない場所では遊ばない。	・事前アンケート（教材と同じ状況で自分はどうするか）の結果を提示し、自分たちの価値に対する考えを確認し、多様な考えがあることを受け止められるようにする。
展開前段	2　教材「裏庭での出来事」を読み、話し合う。 ○主人公がしたことで「いけない。」「よくなった。」と思ったのはどのようなところですか。 ・雄一が職員室へ行っている間も遊んでいたところ。 ・先生が来ても、健が自分もガラスを割ったと本当のことを言えなかったところ。 ・本当のことを先生に話しに行こうと行動したところ。 ・「僕は行く。大輔は自分で決めろよ。」と自分が正しいと思ったことを貫こうとしているところ。	・教材を読む前に、主人公のしたことで、「いけない。」「よくなった。」と思ったところを見つけるように投げかけ、主人公の弱さと気持ちの変化に着目することで、人間理解と価値理解に迫るための視点を焦点化する。
	○健は、先生が来たときに、自分もガラスを割ったことをどうして言わなかったのでしょう。 ・言わなければ「ばれない。」という思いがあったから。 ・自分だけが悪いわけではないと思ったから。 ・大輔が言おうとしていないのに、自分が言うことで大輔との関係を悪くしたくなかったから。	・他者理解を深めるために、仲間の考えの中から、納得や共感できる意見を聞き、自分にも似たような経験がなかったか問いかけて、自分と照らし合わせて考えられるようにする。
	◎健は、どんな思いから、大輔に詰め寄られても「ぼくは行く。」ときっぱりと言ったのでしょう。 ・このまま言わずに逃げたら、きっと後悔すると思ったから。 ・雄一は自分から謝ったのに、自分だけ本当のことを話さないのはよくないと思ったから。 ・大輔が言わないからと言って、自分も合わせて正直に言わないことは、間違っていると思ったから。	・大輔に詰め寄られてもきっぱりと言えた健の決意を、前日の思いと関わらせて考えられるように問いかける。 ・「大輔は困るのではないですか。」と問いかけ、健の意志だけでなく、大輔との関係性にも着目できるようにする。
	【深めの発問】 「やろう。」と言い出したのは大輔なのだから、大輔こそ先生に正直に言うべきではないでしょうか。	・「深めの発問」をすることで、蹴り合う行動を選択したのはあくまで健自身であり、健は自分が選択した行動に責任をもとうとしていることや、良心に従って行動することの大切さに気付くことができるようにする。
	・言い出したのは大輔かもしれないが、一緒に蹴り合うことを決めたのは自分。そう決めた自分にも責任がある。 ・誰が言い出したかは関係なく、自分がしてしまったことに対して、正直に謝らなければいけない。	**【評価の視点】** **自分の行動や決断に対して責任を取ろうとすることの意義を理解している。** ①①
展開後段	3　本時の学習を振り返る。 ○「これまでの自分」「今の自分」「これからの自分」という視点で、自己見つめをしてみましょう。	・本時の道徳的な価値に基づいて、「これまでの自分」「今の自分」「これからの自分」という視点で振り返りをするように促す。
	周囲に合わせて深く考えず行動したり、自分の言動を自分で決定できなかったりしたことがある。でも、どんな状況やどんな場面でも、自分の言動は自分で決定していることに気付いた。今まで、自分の言動に言い訳をすることがあったが、自分の言動に対しては、自分自身で責任をもちたい。そして、正しいと思ったことは、やり抜いていきたいと思った。	**【評価の視点】** **「自由と責任」について自分の思いや経験を振り返り、今後、自分が大切にしたいことについて考えようとしている。** ②②
終末	4　教師の説話を聞く。	・別の事例で「自由と責任」について考え、自分なりに乗り越えた経験の話をする。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

周りの仲間に流されてしまった行動であっても、その行動は自分で決断したことであることに気付き、どんな結果であっても、自分が判断し決断したことに対して責任を取ろうとする態度を育てる。

評 価

ポイント

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

【評価の視点】
① 自分の行動や決断に対して責任を取ろうとすることの意義を理解している。

【評価の視点】
② 「自由と責任」について自分の思いや経験を振り返り、今後、自分が大切にしたいことについて考えようとしている。

ポイント

2 「児童生徒の姿・発言」を想定する

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

想定する「具体的な児童生徒の姿・発言」

①今まで周囲に合わせて深く考えず行動したり、自分の言動を自分で決定できなかったりした。自分で決めたことに対して責任をもち、正しいと思ったことは、やり抜いていきたいと思った。

②どんな状況やどんな場面でも、自分の言動は自分で決定していることに気付いた。今まで、自分の言動に言い訳をすることもあったが、自分の言動に対しては自分自身で責任をもちたい。

ポイント

3 「評価の視点」に迫るための指導の工夫

【評価の視点】に迫るために、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

発問の工夫 ①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」ができるようにするために…

発問「健は、どんな思いから、大輔に詰め寄られても『ぼくは行く。』ときっぱりと言ったのでしょう。」

・主人公自らの意志だけでなく、大輔との関係性にも着目できるようにする。

深めの発問「『やろう。』と言い出したのは大輔なのだから、大輔こそ先生に正直に言うべきではないのでしょうか。」

・主人公が裏庭でボールを蹴り合うことは、自らの自由に由り選択したことであり、自分が選択した行動に責任をもとうとしていることや、良心に従って行動することの大切さに気付くことができるようにする。

学習活動の工夫 ②

「自己を見つめること」ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

・生徒の振り返りに書かれている内容を共感的に捉え、その場で思いを具体的に想起できるように言葉をかけをしたり、自己見つめをできている姿を価値付けたりすることで、「自由と責任」について深く考えられるようにする。

指 導

中学校
第2学年

主題名　人と接するときには
教材名　「気づかなかったこと」

（光村図書「中学道徳② きみがいちばんひかるとき」）

主題構成表

■内容項目
B－（6）思いやり、感謝
　思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。

■価値の分析
・「思いやりの心」とは、自分が他者に能動的に接するときに必要な心の在り方である。
・「感謝」の心とは、主として他者から受けた思いやりに対する人間としての心の在り方である。
・「人間愛の精神」とは、互いの存在を、強さも弱さももち合わせた生身の人間として、肯定的に受け止めようとする思いが普遍化されたものである。
・単に思いやりの大切さだけでなく、自分も他者も、共にかけがえのない存在であることを自覚できるようにすることが大切である。
・思いやりや感謝の気持ちを言葉にして素直に伝えようとする心が、自己と他者との心の絆をより強くするのだということに気付くことができるよう指導することが大切である。

■内容項目から見た児童の実態
・自分の考え方を優先させるばかりに、相手の思いやりに気付かなかったり、自己中心的な行動をとったりすることがある。
・「仲間のよさ見つけ」活動では、仲間のよさを見つけることができるが、言葉や行動としてそのよさや感謝の気持ちを進んで表現する姿は少ない。

■要因
・視野が狭くなり、他者の悪いところばかりに目が向いてしまう傾向がある。
・仲間が自分を支えてくれているという事実に対して、当たり前のように感じている部分があり、感謝の心をもって仲間に接しようとする意識に弱さがある。

■教材の分析
・自分の周りで目にした思いやりのない言動や姿に触れ、人間の嫌な部分にばかり目がいくようになっている主人公の姿について考える中で、主人公が全てのことが嫌になり、絶望的になっていることに気付かせることができる教材である。
・一方で、自分の調子が悪くなった時、知らない人の親切に触れたことをきっかけに、自分は多くの人に支えられ、周囲には思いやりの言動があふれていることに気付く。主人公の視野が広がることで、身の周りには思いやりや親切な姿があふれていることに気付いた主人公の心の変容について考えることができるようにしたい。
・他者の悪い面ばかりに目を向けるのではなく、視野を広げ、よさに目を向けることや、思いやりや感謝の気持ちを言動で示すことの大切さに気付くことができるようにしたい。

■ねらい
　日常生活の中には、思いやりのない行動ばかりではなく、思いやりのある行動もあふれていることに気付いた主人公について考えることを通して、日々の生活で人と接するときに大切なことに気付き、相手に思いやりや感謝の気持ちをもって行動していこうとする態度を育てる。

■展開の構想
・「仲間のよさ見つけ」活動を通して、仲間の親切な面に気付くことやそれを伝えていくことの難しさについて目を向ける。
・人の嫌な面に触れたことで、悪い面ばかりに目が向いてしまい、全てのことが嫌になってしまった主人公の気持ちについて考える。
・「私」が気付いた「すごいこと」について考えることを通して、自分自身が視野を広げ、周囲のよさや思いやりに目を向けていくことや、思いやりや感謝は言動で示すことが大切であることに気付くことで、道徳的価値に迫る。
・高められた道徳的価値観から視点を与えて自己を見つめる。

■基本発問（◎中心発問）
○「仲間のよさ見つけ」は毎日できているでしょうか。また、伝えられているでしょうか。
○主人公の言動に共感できるところはありますか。
○無言で帰宅した時、主人公が「こんな世の中、大嫌い。」と言っていますが、どうしてそう思ったのでしょう。
◎「私」が気付いた「すごいこと」とは、どのようなことでしょう。
○今日学んだことから、自己を見つめてみましょう。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目
B－（６）思いやり、感謝
　思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。

【内容項目について大切にしたいこと】
　自分も他者も、共にかけがえのない存在であることを自覚し、思いやりや感謝の気持ちを言葉にして素直に伝えようとする心が、自己と他者との心の絆をより強くすることに気付くこと。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基に、児童生徒の実態から育成したいこと。

【生徒の実態と要因】
○**よさ**：「仲間のよさ見つけ」活動では、仲間のよさを進んで見つけることができる。
○**課題**：日常生活の中で仲間のよさに気付いたり、それを積極的に仲間に直接伝えたりすることは少ない。
○**要因**：仲間が自分を支えてくれているという事実に対して、当たり前のように感じている部分があり、感謝の心をもって仲間に接しようとする意識に弱さがある。

【実態から育成したいこと】
　日常生活の中には、自分を支えてくれる思いやりのある言動があふれていることに気付き、仲間の思いやりに対して感謝の気持ちをもち、素直に伝えることが大切であると気付くこと。

ポイント

3 「考え、議論したいこと」

「価値の分析」「実態と要因の分析」を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

考え、議論したいこと

　日々の生活の中で人と接する時に、どのような見方や言動をとることが大切なことか。

どこで考え、議論するか

　思いやりのない世の中に絶望していた主人公が、冷静に周りを見回すと、思いやりある行動にあふれていることに気付いた場面。

ポイント

4 「教材の分析」

考え、議論したいことに基づき、１時間の学習で教材をどのように活用するのか構想します。

あらすじ

・買い物に行った主人公は、自分のことしか考えない意地悪な言動を目の当たりにし、思いやりのない世の中に絶望してしまう。
・しかし、自分の体調が悪くなった時に、見知らぬ人から助けられ、ふと周りを見ると、自分は多くの人に支えられ、周囲には思いやりの言動があふれていることに気付く。
・人と接する時に、気になる面ばかりに目を向けるのではなく、視野を広げ、よさに目を向け、思いやりや感謝の気持ちを言動で示すことの大切さに気付く。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】
　日常生活の中には、思いやりのない行動ばかりではなく、思いやりのある行動もあふれていることに気付いた主人公について考えることを通して、日々の生活で人と接するときに大切なことに気付き、相手に思いやりや感謝の気持ちをもって行動していこうとする態度を育てる。

6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫
・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

本時の展開

	基本発問と予想される生徒の反応	指　導・援　助
導入	1　「仲間のよさ見つけ」活動について確認する。 ○「仲間のよさ見つけ」は毎日できているでしょうか。また、仲間によさを伝えられているでしょうか。 ・聞かれれば答えるけれど、日頃から仲間のよさを見つけたり、伝えたりはしていない。 ・「いいな。」と思っても忘れてしまうことが多い。	・「仲間のよさ見つけ」ができていないという実態から、仲間のよいところに目を向けることへの難しさを実感できるようにする。 ・「人と接するときに大切なことは何か」を考えることを伝え、話し合うことへの見通しをもつことができるようにする。
展開前段	2　教材「気づかなかったこと」を読み、話し合う。 ○主人公の言動に共感できるところはありますか。 ・レジで割り込みされた時に、何も言われなくて気分が悪くなった。 ・人に親切にされたときは、すごくうれしかった。 ○主人公は、「こんな世の中、大嫌い。」と言っていますが、どうしてそう思ったのでしょう。 ・どうして、みんなそんなにも意地悪なのだろうと悲しくなったから。 ・周りの人がみんな思いやりのない、悪い人ばかりに見えて不安になってしまったから。 ・みんな自分のことばかり考えていて、怒りが込み上げてきたから。 ◎「私」が気付いた「すごいこと」とは、どのようなことでしょう。 ・周りには、意地悪な人もいるけど、それと同じぐらい親切な人もいること。 ・親切な姿を見ると、その人だけではなく周りの人や見ている自分もうれしい気持ちになること。 ・当たり前と思って気付かなかったけど、世の中にはいろいろな場面で思いやりのある姿がたくさんあること。 **【深めの発問】** 主人公は、どうして気付くことができたのでしょうか。 ・電車の中で親切にされたことで、自分は周囲の人に支えられていることに気が付いたから。 ・これまで、周囲の思いやりあふれる言動に目を向けず、嫌なところばかりに目を向けていたことに気付いたから。	・主人公の言動に共感できる部分に線を引くよう促し、価値理解に迫るための視点を焦点化する。 ・主人公の言動で共感できることを引き出し、基本発問につなげる。 ・思いやりのない言動ばかりの状況に失望している主人公の様子から、視野が狭くなり、他者の悪いところばかりに目が向いてしまっていることに気付くことができるようにする。 ・「こんな世の中、大嫌い。」という主人公の思いを、自分の経験や体験と比べながら考えることができるように「みなさんはどう思いますか。」「似た経験はありますか。」などと問い、多様な考えを表出できるようにする。 ・教材の特徴を生かし、挿絵や登場人物の表情などからも考えるよう助言する。 ・多様な考えを交流する中で、多面的・多角的に自分の考えを深める場を位置付ける。 ・「深めの発問」をすることで、自分が多くの人に支えられていることや、自分の視野を広げることで周囲には他者を思いやる言動があふれていることに気付くことができるようにする。 ・思いやりや感謝の気持ちは、言葉や態度で伝えることで、自分と他者の心のつながりが強くなることに気付くことができるようにする。 **【評価の視点】** **自分が多くの人に支えられていることや、周囲の思いやりある言動に気付くためには、自分の他者の見方を変えていくことが大切だと考えている。** ①
展開後段	3　本時の学習を振り返る。 ○今日学んだことから、自己を見つめてみましょう。 ・これまで自分を支えてくれている他者の言動に目が向いていなかった。そうした他者のよい面が見えるかどうかは自分次第だと思った。これからは人のよい面に目を向けていきたいと思った。 ・仲間のよい面や、思いやりに対する感謝の気持ちは言葉や態度で伝えていくことが大切だと感じた。	・導入時に確認した「人に接するときに大切なことは何か」という視点とつないで、これまでの自分やこれからの自分という点で、本時の学習を振り返るようにする。 **【評価の視点】** **主人公の思いに触れ、自分の思いや経験を振り返りながら、自分が人と接するときに大切にしたいことについて考えようとしている。** ②
終末	4　教師の説話を聞く。	・視野を広げたことで仲間のよさに気付いた生徒について紹介する。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

日常生活の中には、思いやりのない行動ばかりではなく、思いやりのある行動もあふれていることに気付いた主人公について考えることを通して、日々の生活で人と接するときに大切なことに気付き、相手に思いやりや感謝の気持ちをもって行動していこうとする態度を育てる。

評価

ポイント

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

【評価の視点】
① 自分が多くの人に支えられていることや、周囲の思いやりある言動に気付くためには、自分の他者の見方を変えていくことが大切だと考えている。

【評価の視点】
② 主人公の思いに触れ、自分の思いや経験を振り返りながら、自分が人と接するときに大切にしたいことについて考えようとしている。

ポイント

2 「児童生徒の姿・発言」を想定する

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

想定する「具体的な児童生徒の姿・発言」

①これまで気にしていなかったけれど、自分は多くの人に支えられていることに気が付いた。周囲の人の嫌な面にばかり目を向けるのではなく、よい面に目を向けていきたい。

②周囲の人のよい面が見えるかどうかは自分次第だと思った。これからは、周囲の人のよさや感謝の気持ちは、しっかりと言葉で伝えたいと思った。

ポイント

3 「評価の視点」に迫るための指導の工夫

【評価の視点】に迫るために、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

発問の工夫 ①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」
ができるようにするために…

発問「『私』が気付いた『すごいこと』とは、どのようなことでしょう。」
・人と接するときに大切なことを多面的・多角的に捉えることができるようにする。

深めの発問「なぜ主人公は、気付くことができたのでしょうか。」
・自分が視野を広げることで、人は多くの人に支えられていることや、周囲には他者を思いやる言動があふれていることに気付くことができるようにする。そして、思いやりや感謝の気持ちは、言葉や態度で伝えることが大切であると考えることができるようにする。

学習活動の工夫 ②

「自己を見つめること」
ができるようにするために…

本時の学びから自分を見つめる。
・導入時に確認した、「人に接するときに大切なことは何か」という視点とつないで、「これまでの自分」や「これからの自分」という点で、自己を見つめる場を位置付けることで、今後の道徳的実践力につなぐ。

指導

中学校
第3学年

主題名　生命の尊さ
教材名　「命の選択」

（光村図書「中学道徳③ きみがいちばんひかるとき」）

主題構成表

■内容項目

D－(19) 生命の尊さ
　生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

■価値の分析

・中学校の段階では、入学して間もない時期には、小学校段階からの生命のかけがえのなさについての理解を一層深めるとともに、人間の生命の有限性だけでなく連続性を考えることができるようになっている。
・生命科学の進歩と発展により、これまでの想像をこ超えた方法で人間の生と死に関わることができるようになった。そのため生命倫理の在り方が社会的にも課題となっている。
・生命倫理に関わる現代的な課題を取り上げ、話し合い、多様な考えを交流することにより、生命とは何か、その尊さを守るためにはどのように考えていったらよいかなど、生命尊重への学びをより深めることもできる。

■内容項目から見た児童の実態

・生命は有限であり、一度失えば決して取り返すことができない不可逆的なものであることは理解している。
・生命や生命の尊厳について、自分事として捉える意識は低く、自分の気持ちや「これくらいはいいだろう。」という意識が優先し、一歩間違うと生命の危険を感じる行動をとってしまう姿が見られることもある。

■要因

・生徒の生活様式も変化し、自分や身近の人の「死」に接する経験が少なくなり、生命の尊厳や、有限性、連続性について実感を伴った理解は十分ではない。
・尊厳死や生命倫理などの「死」を取り巻く現代的な問題について考える経験が少なく、関心も高くはない。

■教材の分析

・祖父の意志に反して延命措置を施すことについて葛藤する家族の姿を描いた文章から、生命について多面的・多角的に考えさせ、生命を尊ぶ心情を育てることに適した教材である。
・祖父は、自分の病気を知ったとき、延命措置をしないでほしいといった思いや、人生最期の在り方を追求することで、生命とは何か、生命を尊重するとはどういうことかを多面的・多角的に考えさせたい。
・主人公の父母は、祖父が延命措置を望んでいないのに、どうして、人工呼吸器を付けることに同意したのかを追求することで、生命尊重への見方、考え方をより深めさせたい。

■ねらい

　生命の尊厳についての多様な考え方や感じ方に気付かせ、生命の有限性について深く考え、かけがえのない命を大切にしていこうとする態度を育てる。

■展開の構想

・祖父が自分の病気を察し、最期は延命措置をしないでほしいといった時の気持ちや人生の最期の在り方について追求することを通して、生命とは何か、生命を尊重するとはどういうことかについて、多様な考え方や感じ方を引き出していく。
・祖父が延命措置を望んでいないのに、人工呼吸器を付けることにどうして父母が同意したのかを考えることを通して、父母や主人公の気持ちと、自分の気持ちを重ね合わせて考えることで、かけがえのない命を大切にしていくことを感得できるようにするとともに、生命や生命の尊厳を自分事として捉えられるようにする。
・高められた価値観から、かけがえのない命について見つめる。

■基本発問（◎中心発問）

○祖父は、自分の病気を察したとき、延命措置をしないでほしいといったのはどうしてでしょうか。
◎祖父が延命措置を望んでいないのに、どうして、父母は、人工呼吸器を付けることに同意したのでしょうか。
○「かけがえのない命」について、これまでの自分の思いを振り返りましょう。

授業構想の手順

ポイント

1 「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目
D－(19) 生命の尊さ
　生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

【内容項目について大切にしたいこと】
　生命倫理に関わる現代的な課題を取り上げ、多様な考えを交流することで、生命とは何か、その尊さを守るためにはどのように考えていくとよいかなど、生命尊重への学びをより深めること。

ポイント

2 「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基に、児童生徒の実態から育成したいこと。

【生徒の実態と要因】
○**よさ**：生命は一度失うと取り戻すことができない、かけがえのないものであることを理解している。
○**課題**：生命や生命の尊厳について、自分事として捉える意識は低く、自分の気持ちや「これくらいはいいだろう。」という意識が優先し、危険な行動をとってしまう姿が見られることもある。
○**要因**：自分や身近の人の「死」に接する経験が少なくなり、生命の尊厳について実感を伴った理解は十分ではない。さらに、生命倫理に関する現代的な問題を考える機会は少なく関心も低い。

【実態から育成したいこと】
　生命の尊厳とは何かを自分と関わらせて考えることを通して、生命の有限性や連続性を自分事として捉えるとともに、尊厳死などの生命倫理に関わる現代的な問題について関心をもてるようにすること。

ポイント

3 「考え、議論したいこと」

「価値の分析」「実態と要因の分析」を受け、考え、議論したいことを明確にします。

考え、議論したいこと

・生命倫理に関わる現代的な課題。
・生命とは何か、生命を尊厳するとはどういうことなのか。

ポイント

4 「教材の分析」

考え、議論したいことに基づき、１時間の学習で教材をどのように活用するのか構想します。

どこで考え、議論するか

　祖父は延命措置を望んでいないのにもかかわらず、どうして父母は人工呼吸器をつけることに同意したのかを主人公が考える場面。

あらすじ

・祖父の肺にがんが見つかった時、医師は病状と余命について主人公の父と母に伝えた。
・自らの病気を察した祖父は、家族に延命措置をしないでほしいと告げる。
・次第に症状が重くなる祖父を見て、父母は悩んだ挙げ句、延命措置である人工呼吸器を付けることに同意をする。
・人工呼吸器を付けるかどうかを選択する場面に直面したことで、主人公は命について考えることとなる。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】
　生命の尊厳についての多様な考え方や感じ方に気付かせ、生命の有限性について深く考え、かけがえのない命を大切にしていこうとする態度を育てる。

6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫
・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

本時の展開

	基本発問と予想される生徒の反応	指　導・援　助
導入	1　タイトルの「命の選択」と聞いて、どのようなイメージをもったか発表する。 ・　命って選択できるのだろうか。	・「命」に関連して思っていることを発表することで、価値の方向付けをする。
展開前段	2　資料「命の選択」を読み、話し合う。 ○祖母や父母がしたことで、心に残ったところ、考えてみたいことはありますか。 ・祖父は、なぜ延命措置をしないでほしいと言ったのか。 ・どうして父母は人工呼吸器を付けると決心したのか。	・資料に正対した時の感じ方や考え方を生かして、指導過程や基本発問に生かす。
	○祖父が自分の病気を察した時、延命措置をしないでほしいと言ったのはどうしてでしょうか。 ・難しく辛い選択を家族にさせたくない。 ・看護が長引くことで家族に迷惑をかけたくない。 ・機器をつなぐなど人間らしくない生き方は望まない。	・延命措置をしないでほしいと言ったときの祖父の命に対する思いを考え、交流することを通して、生命を尊重するとはどういうことかを多面的・多角的に考えることができるようにする。
	【深めの発問】 あなたが同じ立場に置かれたとき、身近な人のこのような命への考え方は受け止められますか。	・生命に対する考え方は、個々により様々な上に、立場や状況によっても、変わることに気付くことができるようにする。 ・「あなたが」と問いかけることで、「生命」について、自分と関わらせて向き合わせ、生命を尊重するとはどういうことか、自分事として深く考えられるようにする。
	・他人だったら、理屈としては理解できるが、自分の両親の話となったらできないと思う。 ・受け止められているかどうか分からないが、自分では決められないと思う。	**【評価の視点】** **生命の尊さについて、自身の関わりの中で道徳的価値を深めている。** ① ・祖父の思いに反してまでも、延命措置を決定した父母の苦しい思いを感得できるようにする。 ・自分とは異なる生命に対する考えを聞き、感じたことを交流することで、生命への考えを深める。
	◎祖父が延命措置を望まなかったのに、どうして父母は人工呼吸器を付けることに同意したのでしょうか。 ・祖父の思いは尊重したいが、可能性があるならば、最期までできることをすべきだ。 ・何もしなければ、きっと後悔してしまうから。 ・苦しむ祖父を見たくない。	
	【深めの発問】 父の後ろ姿を見つめていた僕は命についてどう考えたのでしょう。	・「深めの発問」をすることで、祖父の命について、正対し、悩み、決断した父の姿から、生命あるいは、生命の尊厳について向き合うことの大切さに気付き、生命の尊さについて多面的・多角的に考えられるようにする。
	・父は決心するのに、相当に苦しんだのだろう。 ・祖父の命は、祖父だけのものではないのだ。 ・何が正解か分からないまま、命と正対することは苦しくても、真剣に向き合い考えなければならない。	**【評価の視点】** **生命の尊さについて、多面的・多角的に考えようとしている。** ②
展開後段	3　「かけがえのない命」について見つめましょう。 ・命に対しての考えは様々であり、置かれた状況によっても変化すると感じた。自分の命は周りの人との関わりの中で生きているのだと思った。	・他の教育活動との関連で、命に関する内容について感想をもったり、話し合ったりすることで、本時で深化、統合する。
終末	4　教師の説話	・命の有限性に関わる教師の体験談を語り、命を大切にしていこうとする実践への意欲を高める。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

生命の尊厳についての多様な考え方や感じ方に気付かせ、生命の有限性について深く考え、かけがえのない命を大切にしていこうとする態度を育てる。

評 価

ポイント

1 【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

【評価の視点】
① 生命の尊さについて、自身の関わりの中で道徳的価値を深めている。

【評価の視点】
② 生命の尊さについて、多面的・多角的に考えようとしている。

ポイント

2 「児童生徒の姿・発言」を想定する

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

想定する「具体的な児童生徒の姿・発言」

①自他の命を尊重するとは、「命は大切」というような一般的なことでなく、常に自分事として考え、自分やその人の命に対する考えを受け止め、命と正面から向き合うことだと思った。

②自分の命は自分だけのものではなく、周囲の多くの人の思いの中で存在していると思った。

ポイント

3 「評価の視点」に迫るための指導の工夫

【評価の視点】に迫るために、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

「道徳的価値の意義や大切さの理解」ができるようにするために…

発問の工夫 ①

発問「祖父が自分の病気を察した時、延命措置をしないでほしいと言ったのはどうしてでしょう。」

・命に対する考え方は、一様ではなく、個々により様々であることを実感できるようにする。

深めの発問「あなたが同じ立場に置かれたとき、身近な人のこのような命への考え方は受け止められますか。」

・「あなたが」と問うことで、命に対する考え方は、自分が置かれている立場や状況によって変わることに気付き、自分事として考えることができるようにする。

「物事を多面的・多角的に考えること」ができるようにするために…

学習活動の工夫 ②

発問「祖父が延命措置を望まなかったのに、どうして父母は人工呼吸器を付けることに同意したのでしょうか。」

・祖父の思いに反してまでも、延命措置を決定した父母の苦しい思いを感得できるようにする。

深めの発問「父の後ろ姿を見つめていた僕は命についてどう考えたのでしょう。」

・祖父の命について、悩み、決断した父の姿から、生命の尊厳について向き合うことの大切さに気付き、生命の尊さについて多面的・多角的に考えられるようにする。

指 導

中山道
太田宿

3　道徳教育パワーアップ実践校
実践事例紹介

(1) 恵那市立長島小学校

①　長島小学校の研究

＜研究主題＞

「自己の生き方についての考えを深める子の育成　～学び合いを通して考えを深める道徳授業を軸にして～」

・研究内容１　年間指導計画における目指す児童の姿の明確化

・研究内容２　生き方について学び合い、考えを深める道徳授業の在り方

・研究内容３　家庭や地域と連携し、「三学の精神　志教育」の充実

②　本年度の実践

（１）研究内容１「年間指導計画における目指す児童の姿の明確化」

（２）研究内容２「生き方について学び合い、考えを深める道徳授業の在り方」

③　研究内容３「家庭や地域と連携し、『三学の精神　志教育』の充実」

(2) 美濃加茂市立東中学校

①　東中学校の研究

＜研究主題＞

「自分を見つめ、よりよい生き方を求める生徒の育成　～「考え、議論する道徳」の授業を通して～」

・研究内容Ⅰ―（１）「考え、議論する」ための手立ての工夫

・研究内容Ⅰ―（２）確かな自己理解のための指導の工夫

・研究内容Ⅱ　日常や特別活動と道徳科の学習を関連させ、学校教育全体で道徳教育を推進するための工夫

②　本年度の実践

（１）全校体制での研究

（２）指導の工夫

③　来年度にむけて

（１）本年度の成果

（２）課題

(1) 恵那市立長島小学校

1　長島小学校の研究

恵那市立長島小学校は、全国学力・学習状況調査の結果から、①自己肯定感は高いが、積極性に乏しい面がある、②社会参加には積極的であるが、社会に貢献している意識が低いという道徳教育に関する現状・課題を明らかにしました。また道徳科の授業では、仲間の多様な考えを受け止め、自分の考えを伝えることを道徳の授業改善の課題の一つとして捉えました。

そこで、学校職員全員で願う児童の姿を描き、①自分のよさを発揮して行動する勇気や強い意志を育むこと、②地域や社会との関わりについての考えを深めることを課題として掲げました。

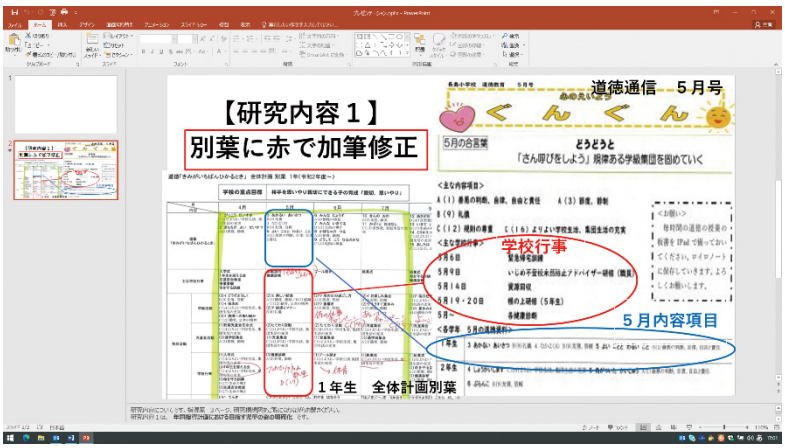
そして、研究主題を「自己の生き方についての考えを深める子の育成 ～学び合いを通して考えを深める道徳授業を軸にして～」とし、道徳の授業改善及び道徳教育の向上を目指して、次の３つの研究内容により研究を進めてきました。

研究内容１	研究内容２	研究内容３
年間指導計画における目指す児童の姿の明確化	生き方について学び合い、考えを深める道徳授業の在り方	家庭や地域と連携し、「三学の精神志教育」の充実

2　本年度の実践

（1）研究内容１「年間指導計画における目指す児童の姿の明確化」

長島小学校では、毎月職員全体に対して、道徳教育推進教師を中心に、その月に行う授業内容や内容項目の確認を行うとともに、そこから目指す児童の姿を共通理解することを大切にしています。また、学校行事や各教科の領域との関連を意識するための確認と見直しを行っています。



（2）研究内容２「生き方について学び合い、考えを深める道徳授業の在り方」

長島小学校では授業改善に向け、外部講師を招いて、教員一人一人の授業力を向上させるために研修会を実施してきました。そして、授業の中で大きく３つの工夫（導入の工夫、展開の工夫、終末の工夫）を考え、実践を進めてきました。

①導入の工夫

導入では、生活に関わる実体験を問う「生活導入」と、どう思うかを問う「教材導入」の２つを、資料や児童の実態から教師が選択することで、「今の自分を見つめる」ことができるようにしました。

具体的には、「生活導入」「教材導入」のどちらにおいても事前に行ったアンケート調査の結果を提示したり、気付かせたい道徳的価値に関わる率直な気持ちを交流したりしました。

【第５学年 C勤労、公共の精神資料名「クール・ボランティア」】

「どんなボランティアをしたことがありますか。」のアンケートを踏まえ、児童が地域や社会との関わりを振り返り、資源回収や草むしりなどの経験を想起して、本時の資料への関心を引き出しました。

〔導入の様子〕

②発問の工夫

児童の多様な考え方や感じ方を引き出し、自分の感じ方や考え方に気付かせることを大切に、発問を設定しました。特に、本時気付かせたい価値に迫る中心発問によって多様な意見が出た後に、さらに多面的・多角的に考え、「なるほど」「そういった考えもあるのか」と、新しい価値に気付いたり、価値を捉え直したりできるよう深めの発問を用意し、指導案に明記しました。

【第１学年 Ｂ親切、思いやり 資料名「くりの み」】

うさぎさんの気持ちを十分考え交流した後、「ありがとう」と発言した児童に対して「その後、きつねさんは続けて何て言っただろう。」と教師が全体に問うことで、「うそをついてごめんね。」「うさぎさんは優しいな。」という様々な思いや考えを引き出すことにつなげました。

〔発問により考えを深める様子〕

③終末の工夫

終末では、深めの発問によって広がった「なるほど」「そういった考え方もあるのか」というような、道徳的価値への見方を基に、一人一人が価値について深く考え、これからの生き方を見つめることを通して実践への意欲を高めることを大切にしてきました。教師の説話では、日ごろの生活場面とつなげる話題を扱ったり、保護者からのメッセージや地域の方へのインタビューを文章や動画で伝えたりしました。

【第４学年 Ｃ勤労、公共の精神資料名「琵琶湖のごみ拾い」】

進んで働くことの価値に気付き、実践意欲と態度を高めるために、児童が家で手伝いをする「一家庭一ボランティア」の取組を取り上げました。その中で、保護者からの「毎日自分からお手伝いをしてくれて、すごく助かったよ。これからもよろしくね。」というメッセージを紹介すると、どの児童もうれしそうな表情を浮かべました。

〔保護者のメッセージを聞く様子〕

3　研究内容3「家庭や地域と連携し、『三学の精神　志教育』の充実」

長島小学校では、道徳教育を充実させる一環として、家庭や地域との連携を大切にしてきました。「自分のよさを発揮して、行動する勇気や強い意志を育むこと」を課題とし、学林委員会との連携、コミュニティ・スクールを機能させた家庭・地域との連携を柱とし実践を進めました。

学校林を活用した学林活動では、

①ふるさとを愛する心を育む
②歴史を学ぶ中で次世代に送る願いや思いを知る
③地域の方の思いに触れ、学校や地域について共に考える

の３点について、学校運営協議会と目的を共有し、地域の方から学び、地域の方との関わりを深めました。そして「地域や社会との関わりについての考えを深める」ことで、活動を通して地域への誇りをもつことにつなげる意識をもち、共に連携して進めてきました。また、家庭や地域との連携において、「子供たちを地域全体で育てるという当事者意識」を双方がもって実践するために、「主体的な判断をすること」や「自分の考えやよさに自信をもつこと」など道徳教育の目標として掲げる「自己の生き方」を考える力を育みたいという共通の願いを通信や懇談会等で伝え続け、地域の人的、物的財産を生かした道徳教育を進めています。

⑵ 美濃加茂市立東中学校

1　東中学校の研究

東中学校は、全校生徒８６３名の大規模校です。また１３％が外国籍であり、生徒は多様な価値観をもって生活しています。東中学校では教育目標「豊かな自己を築こう～自立・自治・自学～」を掲げ、多様な背景をもつ生徒一人一人に「自己を見つめる力と他を思いやる心を育てる」ことを大切にしています。

全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の回答から、人の役に立つことや仲間と協力することに前向きな生徒が多いことが分かりました。一方で、自己肯定感が低いことや主体性に欠ける傾向もつかむことができました。また、仲間と協力しようとしながらも、意見が異なる相手との話合いに消極的であったり、地域社会をよりよくしていこうという考えに至っていなかったりする実態もありました。

このような生徒の実態から、自分自身のよさや生き方を見つめ直すこと、自立した一人の人間として他者の考えを受け入れながら、社会参画への意識を高めたり、夢や希望をもてるようにしたりしていくことが、道徳教育推進における課題であると考え、道徳教育の研究主題を次のように定めました。

【研究主題】
自分を見つめ、よりよい生き方を求める生徒の育成
～「考え、議論する道徳」の授業を通して～
【研究内容】
Ⅰ－（１）「考え、議論する」ための手立ての工夫
・教材の範読を聞く時の視点の提示
・人間理解、他者理解、価値理解を通して、考えを深めることができる発問の工夫
Ⅰ－（２）確かな自己理解のための指導の工夫
・ネームプレートを活用した意見の類型化
・自分に引き寄せて考えるための様々な指導の工夫（問い返しや深めの発問など）
・自己を見つめるための振り返りシートの活用
Ⅱ 日常や特別活動と道徳科の学習を関連させ、学校教育全体で道徳教育を推進するための工夫
・日常や行事、特別活動と道徳科との関連を図り、意図的に指導するために年間指導計画の見直しを図る

2　本年度の実践

本年度は「道徳的諸価値の自覚を深める指導を通して、生徒自らが成長を実感したり、今後の課題や目標を見つけたりして、人間としての生き方について考えを深められるような道徳科の授業の実践」に重点を置いて取り組みました。

（１）全校体制での研究

① 外部講師を招いての研修会

年度当初より、外部講師を招き校内研修を行いました。「道徳科の特性を生かし『考え、議論する道徳』の授業」について具体的な手立てやその意味を学び、全教員で共通理解をしました。【写真①】

また、道徳科の授業を行う際に課題として感じていることを交流し、導入や終末の進め方、発問や問い返しの在り方、生徒の意見のつなぎ方、交流の在り方について共通理解をし、研究内容に反映しました。

〔写真① 校内研修の様子〕

② 学年部による指導案検討会

全教員の道徳科の授業の実践力を高めていくために、実践校中間報告会で公開する授業の指導案を学年部で検討しました。８月には、でき上がった指導案をもとに外部講師から指導を受ける場を設け、学年教員全員が参加し、道徳科の授業の具体的な指導について理解を深めました。

（2）指導の工夫

研究内容Ⅰ―（1）「考え、議論する」ための手立ての工夫

① 導入の工夫

教材の範読を聞く際の視点を提示しました。例えば、第１学年「父の言葉」では、主人公が赤い松葉杖の子にしたことで「残念だな。」と思うことを考えながら聞くよう示し、範読後には視点に対しての考えを交流しました。また、第２学年の「あと一歩だけ、前に」では、事前アンケートと自分を関わらせながら、誰もがもつ弱さについての共有を図りました。これらの導入の工夫により、価値について生徒が主体的に考えやすくなりました。

② 発問の工夫

第３学年の「闇の中の炎」では、絵を真似し続ける主人公の気持ちを考え、人間理解を促す発問をした後、「間に合わないのに、新しく描き続けたのはなぜか。」と本時の価値にせまる発問を行いました。第１学年の「裏庭での出来事」でも、人間理解を促す発問と、その後の価値理解を深める発問を意図的に位置付け、展開後段には自分の生き方を見つめ直せるよう、「これまでの自分」「今の自分」について考えるという視点を明らかにした発問を用意しました。授業の中心発問を核にしながら、発問を意図的に位置付けたことにより、生徒は道徳的諸価値を自分との関わりの中で捉え、人間としての生き方について考えられるようになりました。

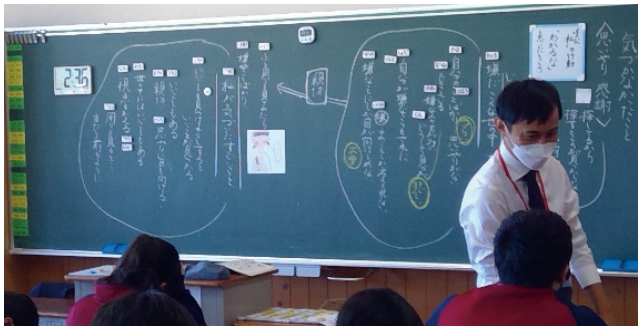
研究内容Ⅰ―（2）確かな自己理解のための指導の工夫

全ての指導案に、生徒が確かな自己理解を図れるように指導方法の具体を位置付けました。

にじ１組の「橋の上のおおかみ」では、生徒の実態を考え役割演技を位置付けました。行為を通しながら心情を理解していくとともに、仲間の役割演技を見ることで自分とは異なる感じ方にも触れ、他者理解を深めていきました。【写真②】

写真②　役割演技の様子

第２学年の「気づかなかったこと」では、「Ａさんの意見を聞いて、こんな風に意見が変わったというような感想を教えてください。」と他者理解を踏まえて確かな自己理解へとつなげていく問い返しをしました。また、ネームプレートを活用し板書に位置付けながら、個々の意見を整理し、生徒が他者理解を踏まえて自己理解を深めていくための手掛かりとなるようにしました。【写真③】



写真③　板書の様子

3　来年度に向けて

（1）本年度の成果

第３学年「命の選択」では、明確な意図をもった発問のもと、道徳的な課題を自分事として捉え、考える生徒の姿がありました。振り返りシートいっぱいに考えたことを書き、「答えが出ない」と悩む姿、考え続ける姿もありました。研究を進める中で、生徒が道徳的諸価値の理解を深めながら、自己を見つめ直す姿を生み出すことができました。教員が一丸となり道徳科の授業の実践力を高めていくことができた結果です。

（2）課題

本年度は研究内容Ⅰを中心に取り組みましたが、研究内容Ⅱについては課題が残りました。生徒が自分のよさに気付き、社会の中で夢や希望をもち、多様な人々と共生していくためには、生き方について力強く前向きに捉えていく必要があります。そのために他の教育活動との関連を図り、指導の手立てを改善し続け、ねらいを明確にし、要としての道徳科の授業を充実させていきたいです。

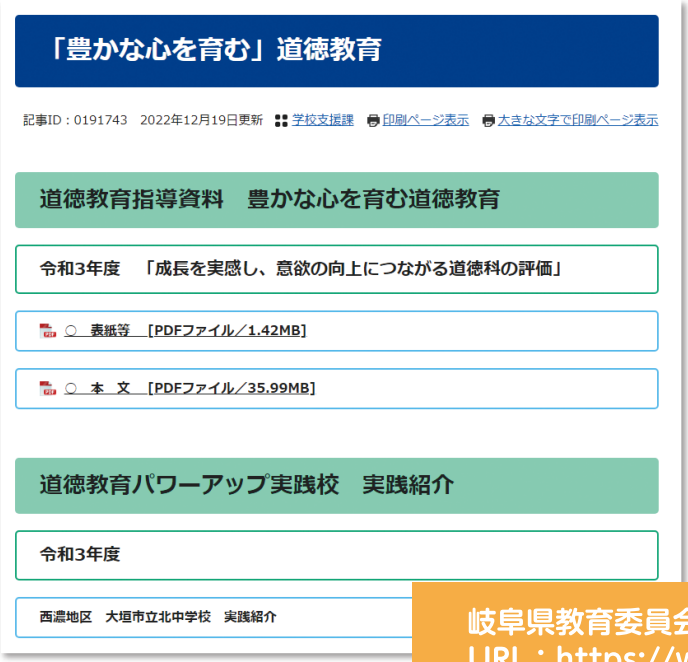
また授業においても、他者理解から、より確かに自己の生き方について考えられるように、仲間に伝える意識、仲間とよりよい生き方を追求する意識を高めていきます。

情　報　提　供

(1) 文部科学省　「道徳教育アーカイブ」

文部科学省「道徳教育アーカイブ」　URL：https://doutoku.mext.go.jp/

(2) 岐阜県教育委員会ＨＰ「ぎふっこ学び応援サイト」『豊かな心を育む』（教員用のページ内）



2次元コード

岐阜県教育委員会ＨＰ「ぎふっこ学び応援サイト」
URL：https://www.pref.gifu.lg.jp/page/191743.html

※今年度の「道徳教育パワーアップ実践校 実践紹介」は２/２年次終了後の令和５年度に掲載します。